

# आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館  
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市槇島町千足80

## \*\*\* 図書館とコミュニティ \*\*\*

京都文教大学図書館長

総合社会学部・教授 (国際協力・CSR) 島本 晴一郎

我田引水のように恐縮だが、京都文教大学図書館・短期大学図書館は宇治市図書館との間で連携協力に関する覚書を締結している。地域の学術・教育・文化の発展及び図書館サービスの向上に寄与するのが目的だ。この秋には宇治市中央図書館が市民利用者を募って、わが図書館への見学バスツアーを実施した。これを機に大学・短大図書館を利用する市民の姿が増えてくることだろう。

今や大学図書館といえども、コミュニティとの係わり合いは重要な役割のひとつだ。さまざまな機会を捉えて、市民との知的交流を促進することが望ましい。私たち大学図書館は学内で「ぶっくらぶ」という企画を始めた。本学教員が自著について、その意図や工夫を自由に語るという試みだ。これには学生、教職員は勿論だが、本学で学ぶ宇治市高齢者アカデミーの方々が積極的に著者との対話に参加している。他大学でも、地域市民との対話を様々な方法で試みているようだ。この秋、甲南大学図書館は、『「いき」の構造』で知られる哲学者九鬼周造や同学創始者平生釦三郎のアーカイブを公開し、「大学図書館と貴重資料コレク

ション」と題した市民公開講座が評判を呼んだ。

もっとも図書館とコミュニティと言えば、やはり公共図書館であろう。西宮市立中央図書館は、9月に「暮らしの手帖」特別展を開催したが、市民からの問い合わせがひっきりなしだったそうだ。アーカイブにあった戦後間もない頃の創刊号から最新号までの別冊も含めた堂々470冊が一般公開されたのだ。企画者の住田麻里子さんの話では、消費者教育の一環として以前より構想を温めていたと言うが、NHK朝ドラの「とと姉ちゃん」で高まった市民の関心を見逃さなかった。

図書館とコミュニティの関係は、非常時には一層緊密になる。熊本地震に襲われた益城町図書館(ミナテラス)がその一例だ。4月14日、16日と、2回に亘って益城町を直撃した巨大活断層地震〔熊本地震〕は、その後の余震もあいまって甚大な被害をもたらした。鉄筋コンクリート建てのミナテラスも被災し、書架、什器類の倒壊、図書資料の崩落のほか、フロアに段差が発生して利用が出来なくなった。早くも共用空間は避難者の生活場所となり、下ろされた閲覧室シャッターの向こ

う側では、図書館員の途方もない復旧作業が続いた。しかしこのような中で、司書たちは考えた。被災地であるからこそ図書館が必要ではないのかと。かくしてその熱意は6月には、隣の空き地のプレハブ「よかましきハウス」でのミニ図書館として実現する。避難者に対する語り聞かせや子供向け絵本の貸し出し等、話に耳を傾けたり、実際

に図書を手にする事の喜びが、被災コミュニティの復興パワーとなったことは容易に想像できる。

こう考えると、図書館とコミュニティとの関係は、図書館からの能動的な働きかけがあればこそ成立するものなのだ。図書館は「知の拠点」であり、まさしく「地の拠点」でもあるのだろう。

(しまもと せいいちろう)

### \*\*\*「熱病」\*\*\*

総合社会学部・准教授(チベット仏教、瞑想の脳科学) 永 沢 哲

物語への渴望は、熱病のように襲う。

そのことにはじめてははっきり気づいたのは、20歳をすぎた頃のことだ。

ガルシア・マルケスに出会ったのは京都だった。

東京の大学に通っていたわたしは、講義がつまらなくて、修学院の友だちの下宿に転がりこんでいた。昼は社会学のゼミにもぐって本を読み、夜は東の空が白むまで麻雀を打ち続ける。あいまに奈良のお寺に出かける。そんな日々になんか飽きてきた頃、1人の友人が、「これを読め」と言っていて、『百年の孤独』をぐいとわたしに突きつけたのである。

東京にもどったわたしは、食事をするののもどかしく、魔術的リアリズムの小説に読みふけた。

時計の止まった村。土を食べ続ける少女。ジプシーの女。読み終わっても、次の日にはまた読みたくなる。それを何回も繰り返す。一段落したのは、たぶん6回目のことだった。(ちなみに映

画の場合、1番たくさん観たのは『ブレードランナー』。40回で終わりが来た)

それから手に入るマルケスの本はすべて読み、映画を観た。ボルヘス、アストゥリアス、コルタサル、プイグも読んだ。数年後、熱は冷め、ラテン・アメリカの本は、——仕事に必要なものを除いて——、それ以降、1冊も読んでいない。

その次の小さな波が来たのは、10年ほど後のことだった。今度は、ミラン・クンデラ。プラハの春の後の時代を、人々がどのように生き延びたのか、あるいは生き延びそこなったのか。けれども、それにもまして、わたしにとって重要だったのは、物語の背後で鳴っている音楽だったような気がする。

垂直に鋭く立ち上がる尖塔を持ったゴシック様式の教会、占星術、錬金術、ゴーレム、迷路のように入り組んだ狭い道、カフカ、機械仕掛けの時計。だが、それだけではない。

プラハは、ウィーンに次ぐヨーロッパの音楽都市だ。モーツァルト、バッハ、ヴィバルディ、あ

るいはルネサンス以前の曲が、いくつものホールで、毎晩演奏される。教会でも、連夜ミサ曲が奏でられる。ヨーロッパ中から、ヴァイオリンや古楽器の打楽器、そして小銭を集めるための帽子をもってやって来た若い音楽家たちが、橋の上、街角、ビアホールで、腕と想像力、創造性を競いあう。

クンデラの文章には、4次元から成り立っている不思議な色彩感覚とともに、石畳みの街で鳴り響いてきた、中世——あるいはそれ以前——にまで遡る音楽の記憶が埋め込まれている。

最近の発作は、今年の春、ウエルベックの名前とともにやってきた。とはいえ、今回は、はしかのようなもので、ごく軽い。同じく南フランスで狂気を発したアルトーと違って、ウエルベックは、近未来小説の形式を選ぶことで、機械やインターネットと接合しながら増殖する現代の無意識の悪夢と折り合いをつけようとしている。それを

可能にしたのは、——ガリシア地方出身の祖母に育てられたマルケスと同じく——、柔らかく抱きとめ、温かい食事を準備してくれたおばあさんの記憶であるように思える。

10年前、白いベニアの扉で区切られた売春宿のすぐ外、紫色のガラス窓でおおわれた茶館で、チベット人の友人と話しこんでいたわたしは、ボルヘスやマルケスのチベット語訳が存在し、彼らが、クンデラについてもよく知っていることに驚かされた。

遺伝子操作によって、あるいは父権の復権によって、人類は破滅を免れることができるだろうか？

そう問いかけるウエルベックにたいして、人工知能による仮説——検証のサイクルを数年後に開始する中国で生きる彼らは、どう答えるだろうか。今度、ゆっくり話してみたいと、思っている。

(ながさわ てつ)

## \*\*\* それぞれの物語 \*\*\*

幼児教育学科・講師(芸術) 北川 太郎

あまり映画とか見ないから良く分からないが、K先輩が映画監督として、結構な活躍をされているそうだ。学生時代の先輩は、まあ良く言えば自由奔放で豪快な人だったが、純朴な学生生活を送っていた私にとっては、何を考えているのか分からない短気で怖い先輩でしかなかった。たまたま飲み会なんかに誘って下さる事もあったが、結構な恐怖だった。私が通っていた大学では年に1度、美大祭と言う、大学祭をグッチャグッチャに

した感じの、何でもありの3日間の行事があった。学生が其々の大きなテントに、飲み屋とか、食べ物屋、ディスコとかを作って、夜通し飲んだり、踊ったりするのだ。私も友人とチームを作り、飲み屋をやっていた、そこに嬉しそうな顔をしたK先輩がやって来て「名人(当時、私は名人と呼ばれていた)、あっちの店で飲まへんか？」と誘ってきた。この笑顔は何かを企んでいるな……と察した私であったが、断る度に顔色が変わっていく

先輩のお誘いを、固辞するほどの勇氣はなかった。テントに行ってみると、7、8人で飲み会をやっていた。いつもならK先輩が1番奥の席にボスの様に座るのだが、何故かその日は「名人、強引に誘って悪かったな、遠慮せんと奥の席に座れよ。」と優しくった。会話が弾み、お酒も進んで気持ち良くなってポーッとしていると、急にバババッと音がして、テントの電気が消え真っ暗になった。何事が起ったか分からないが、とにかくヤラレタ、と思って外に逃げようと靴を探したが、芸が細かい事に私の靴は持ち去られていた。仕方がないから、テントのランプを付けると、もう1人取り残されている人が居るじゃないか!! 可哀想に、この人もヤラレタのか、と思って声をかけると酔いが覚めるほどの美人ではないか。今でも苦手だが、当時の私は今の何倍も女の子と話すのが苦手だった。特に美人で可愛い女の子となると駄目だ。緊張して、会話らしい会話なんて出来たもんじゃない。その後はず〜と沈黙である。一事が万事でこんな感じだから、先輩との飲み会は恐怖だった、と言ったのにも頷いて貰えるだろう。こんな厄介な先輩ではあるが、印象に残っているやり取りがある。ある時、先輩が「名人、自分自身は社会の中で主人公やと思うか?」と唐突に尋ねてきた。「当たり前でしょう。何処に自分が脇役やと思って生きている人が居るんですか?」って答えると、「それがな……こいつらK先輩が主人公や、って言うんや。」って一緒に飲んでた仲間を見渡した。「そりゃ〜、K先輩の人生ではK先輩が主人公でしょうが、僕の人生ではK先輩は脇役ですよ。」って答えると、「お前だけやな、お前しかおらんわ、作家になるんは。」と、この時の予言めいた言葉が、当たっているの

かどうか分からないが、確かに20年ほど経た今でも私は彫刻を造り続けている。

彫刻は確かに石を彫ったり、木を彫ったり、粘土を取ったり付けたりして、出来上がった形であるが、私は彫刻を通して、世界を創り出していると考えている。だからという訳では無いが、制作中、他人の世界が自分の世界に影響を与えるのを好まない。無限に広がる自分自身の世界観を掘り下げるには、深い沈黙の時間が必要である。制作に向き合うにあたって、テレビを見たり、音楽を聴いたり、本を読んだりすることは無い。そんな人生の何が楽しいの? って、たまに聞かれるが、分からない。20代、30代は彫刻制作と旅の繰り返しだった。世界中を旅したが、旅の最中はよく本を読んだ。『アルケミスト——夢を旅した少年』（パウロ・コエリョ著）をサハラ砂漠のベルベル人のテントの中で、『コンスタンティノープル陥落す』（S. ランシマン著）をイスタンブールに向かう飛行機の中で、『剣客商売』（池波正太郎著）をアンデス山中で読み、カツ丼を食べる為だけに国境を越えた事もあった。様々な人と出会い、様々な物語があった。地球の裏側からやって来て、3年間、石ばかり彫っていた変な男が、クスコの少年の物語に脇役として登場するのも悪くない。

(きたがわ たろう)



## 🍴🍴🍴 私のすすめる3冊 (私の推薦図書) 🍴🍴🍴

ライフデザイン学科・教授 (トレーニング科学) 森井 秀樹

### ◎ 『本当は怖い「糖質制限」』

岡本 卓 著／祥伝社. 2013

著者は開業医で、「糖質制限」反対派である。糖質制限は、脂質とタンパク質の過剰摂取を招き、結果として心臓病、脳卒中、糖尿病、癌を誘発すると指摘している。その為、著者は正しいダイエットの方法は、カロリー制限と運動習慣であると述べている。私は、この本を読み進めるうちに、なぜここまで炭水化物の摂取に拘るのか不思議に思えた。糖質制限の有効性についてのエビデンスが、ここ数年多く見当たる。しかし、日本の医師の多くが「糖質制限」を危険と考える理由が、この本にあるように思う。

### ◎ 『炭水化物が人類を滅ぼす』

夏井 睦 著／光文社. 2013

本書は、「糖質制限」賛成派の医師によって執筆された。糖質摂取が、生体に及ぼす影響を分かりやすく解説し、糖質制限にかかわる問題点についても、ひとつひとつ解決し、「糖質制限」の有効性について述べている。特に、炭水化物が主食となった経緯や、カロリーの概念、食事バランスガイドの不思議など、食や栄養を専門とする学生にも一読を勧める。私が「糖質制限」を研究テーマの一つとする切っ掛けにもなった図書である。

### ◎ 『人類最強の「糖質制限」論』

江部 康二 著／SBクリエイティブ(株). 2016

著者は、糖尿病を治療する医師であり、「糖質制限」の第一人者でもある。本書では、「糖質制限」を安全に継続する方法を分かりやすく述べている。特に、食生活パターンから日常の食事における糖質摂取のポイントを事例とともに詳細に解説している。糖質制限ダイエットを実践しようとする人にとって最高のマニュアル本でもある。また、本文中にも紹介されている『糖質制限ドットコム (.com)』は、著者の監修のもと糖質制限食品を販売する通信サイトである。私も会員登録し、毎日の食環境を楽しんでいる。

(もりい ひでき)

## 🔥🔥🔥 『サハラに死す』を読んで 🔥🔥🔥

臨床心理学科3回生 藤田 昂 樹

かつてサハラ砂漠の単独横断に挑んだ1人の青年がいた。名を上温湯隆といい、年は21歳であった。相棒は1頭のラクダ。今から40年前の出来事である。『サハラに死す』は過酷な道中に彼がつづった日記をまとめたものである。

サハラ砂漠は東西7000kmにわたり、日中は40度を超える灼熱の地である。見渡す限り砂がひろがる別世界で、日をさえぎるものはなにもなく、ラクダとともに一日中太陽にあぶられる。生命線となる水は、砂漠にぼつぼつと点在したオアシスをたどり補給するしかない。途中水が尽きてしまったら、道を間違えてしまったら、怪我で動けなくなったら。携帯電話も、緊急事態を伝える方法もない。待っているのは死である。彼はサハラ砂漠を相手に生きるか死ぬかの戦いを挑んだのである。

なぜそのようなことができたのか。彼はつかもうと必死だったのだ。人生とはなにか、自分とはなにか。これからの自分の核となるものを彼は旅を通して得ようとしたのである。それは危険のない、安逸な日常では決して手に入らない。自らの限界に挑戦し、死と隣り合わせに生きていくことでしか得られないものもあるのだ。

彼は日記に書く。「死への恐怖に耐えられるならば、この世に何が恐ろしいものがあるろう。死へ挑む勇氣、これがあるならば、何も恐れることはなく人生を闘い抜いていける。誰にでもあるだろ

う自由に思いっきり持っている力を発散させ、何ものにも縛られない自分となろうとする自分が。そのために僕はサハラに来た」

彼は命を燃やしてまで見つけ出そうとし、そして燃え尽きてしまった。そう、彼は死んだのである。道半ばにして倒れ、誰にも看取られることなく砂漠の大地の真ん中で22歳の短い人生を閉じたのである。これは現実の出来事でありハッピーエンドで終わらない。死因は餓死、もしくは渴死と考えられている。結末はあまりに厳しく、無残であった。

人によっては馬鹿なことしたもんだと思うかもしれない。しかし、私は、意味はあったのだと、命を失ったこの挑戦に意味はあったのだと考える。彼の母は息子に言った。「人間の価値はその死に際で決まる。死ぬ瞬間に往生際の悪い人はとるにたらない。潔く死ぬように心にとめておきなさい」

彼の死の間際の言葉は残っていない。どのような思いであったのかはわからない。しかし私は、彼は覚悟をもって死に対して臨んだのだと信じている。そしてその瞬間、彼はようやく追い求めたものをつかんだのではないだろうか。悟ることができたのではないだろうか。もちろんこれはただの私の想像である。実際のところはわからない。しかし、私は思う。意味はあったのだと。

(ふじた こうき)